

# カゲミ・ミツツキの島 巡り冒険記

ルヴァンシュ

## 【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

## 【あらすじ】

||メレメレ島篇||

カントー地方からアローラ地方へ、遠路遙々やって来た、至極平凡な少女、カゲミ・ミツツキ。

—— 南国のパラダイスであるアローラを舞台に繰り広げられる、島巡りと言う名の大冒険——  
まだ見ぬ出会いをもとめ、11歳の少女は今、旅立つ！

※多少の展開変化はあれど、ほぼゲーム本編のストーリーを追っていきます。

※基本的にムーンを軸にしています。

※少なくとも2017年4月までは不定期更新です。

# 目次

冒険のプロローグ	1
ウエルカム・トウ・アローラ!	8
リーリエとほしぐもちゃん	22



# 冒険のプロローグ

.....

.....

.....ピロン！ ピロン！ ピロン！

「んっ」

机の上に置かれている小型モニターから音が鳴った。のそのそと、部屋に散らばる小物を玩んでいた少女は手を止め、モニターをちらつと見た。

Ⅱアローラ地方のククイ博士から連絡ですⅡ

「！」

少女はがばりと立ち上がると、椅子に座った。応対ボタンを慌ててタッチする。

そして映し出されたのは、白い帽子を被った男の顔だった。向こうの画面が傾き気味なのか、少々斜めに映っている。

「ちよつと待って……」

そう言いながら、ククイ博士は画面を安定させた。

わくわくを隠し切れずうずうずする少女は、安定するや否やすぐに、

「こ、こんにちば！ ククイ博士！」

と、手を振った。それに応え、ククイも手を振った。

「やあ、こんにちば！ カゲミ、元気良いねえ！」

「はい！ 元気です！ 元気出ました！」

「ハハハ！ その上擦りようから察するに、さつきまで、ちよこつとメンドーなことをしてたのかな？」

「あー、分かつちやいましたか？ えへへ……」

カゲミはさつきから私物の整理をしていた。引越し用の段ボールに詰め込む作業——まだ11歳の少女であり、さほど多くの物を持っていないと言えども、辟易とする作業であった。

「分かるよその気持ち！ 僕もそつちカントーに引越したことがあるけどさ、どれから手を付けていいのか迷うし、すぐ目移りしちゃうので、全然進まないもんだよね」

「折角すぐそこに楽しいことがあるのに……お邪魔つたらないです」

「そういうものだよ！ 楽しいことがあれば、同様に、面倒つちいことだつてあつたりするもんなのさ——けどその分、それから解放されるだけあつて、楽しいことはより一層楽しくなるだろう？」

「ああ！ なるほどですね！ それもそうです」

「プラスに考えようぜ、カゲミ！　そうすりゃ、人生楽しめる！」

「はい！」

ここで、ククイは一度咳払いした。

それはさておき。

「カゲミ！アローラに引越する日がいよいよ近付いてきたね！」

「はい！　もうすぐですっ！」

「良い声だねえ、こつちまで楽しくなってくるぜ——実際のところ、実際に体験した方がよっぽど良いけれど、その前に、アローラのことをちよこつとだけ紹介しようと思ってね。連絡した次第だよ」

モニターに、別ウィンドウで地図が映し出された。四つの島と一つの人工島で構成された地方——アローラ地方だ。

「アローラは幾つかの島が集まってできている地方。それが理由なのか、珍しいポケモンばかりだぜ！」

「珍しいポケモン！　えっと、カントーにはいないポケモンも、沢山居るって聞きました——！」

「勿論さ！　例えばそうだね……この子とか！」

そう言うときククイは、手の中の丸いボールを上に向かって投げた——モンスターボー

ル。ポケットモンスター、縮めてポケモンを捕まえておくための道具である。

ボールが開くと、中から光と共に、犬のような姿をしたポケモンが飛び出した。クリーム色の毛並みで、首元の毛には小さな岩が幾つも付いている。

「わあ!？」

カゲミは目を輝かせた。

「可愛いポケモン!」

「イワンコだ。こいぬポケモンのイワンコ。可愛い見た目だけれど、ガッツあるヤツなんだぜ! 隙あらば……あいてっ!!」

「きやうんっ!」

尻尾を激しく振りながら、イワンコがククイの手に噛み付いた。けれどククイは満足げな顔。

「痛いなあ——でも、どうした、前より威力が上がっている! 良いじゃないか、ナイスな『かみつく』だぜ、イワンコ!」

「きやうんっ!」

「え、えつと!?! 博士、大丈夫ですか!?!」

「おおつと! 要らない心配、掛けさせちゃった? 僕は平気、ほら、ピンピンしてる」

「いや、血出てますよ」



「いつもの事さ。何の問題もないぜ！」

「問題あると思えますが!？」

「カゲミには、言ってなかったかな？ 僕はポケモンの技を研究しているんだぜ——

技つてのは、観察も大事だけれど、それと同じく実際に体験して見るのも重要なのさ！」

「は、はあ……！ なるほど!？」

受け入れ難いが理解したカゲミ。少なくとも自分は技を受けたくないなあ、と思っ  
た。

イワンコはびよん、と、ククイの肩に乗った。

「と、このように、ここで見られないポケモンは沢山居るぜ！ 楽しみにしてくれ

よな！」

「はい！ 私、早く直に会いたいです、イワンコに！ ……噛まれるのは、ちよこつと遠

慮しますけれども」

「ハハハ！ 僕たちみんな、君の到着を楽しみに待ってるぜ！ 勿論、島のポケモンたち

もね！」

「きゃん！ きゃん！」

「はいっ！」

ククイは頷き、ちよこつと腕時計を見た。にやりと、悪戯っぽく笑う。

「あんまり話していると、より時間が掛かっちゃうね——カゲミ！　楽しみ、募らせておいてくれよな！　それじゃあ、切るぜ」

「あつはい！　さよなら！」

ククイは手を振ってから、通信を切った。モニターのデスクトップには、南国的な画像が映し出されている。

「は~~~~」

カゲミは、モニターの横にあるガイドブックに手を伸ばした。何となしに開いたページには、アローラ地方の写真と、ポケモン保護団体《エーテル財団》を特集した記事が……。

アローラ地方……いったいどんなところなのだろう。カントーとは全然違う島国——豊かな自然に囲まれた南国——愉快適悦パラダイス！　カゲミは遠い地に想いを馳せるのであった。

……しかしながら。

「カゲミ、そろそろ引越しの準備始めましょー！」

「……………あ」

そのような余韻に浸る暇はあんまりなく——今は、楽しむための下準備に勤しむべきときである。カゲミはさつきとは裏腹に、より一層重い気分で、ごちゃついた床を見る

のであつた。

# ウェルカム・トゥ・アローラ!

## 【第1話】

3ヶ月後……



煌々と輝く星々。豊かな海と自然に囲まれた南国パラダイス。そんなアローラ地方の南西部にあるこの島の名は《メレメレ島》。

そのメレメレ島の北部に、まるで白いコテージのようで、そこそこ大きな家がある。最近建ったそこに、カゲミたちは引越して来たのである。

太陽の隠れる夜であっても、南国的な雰囲気は一切の翳りは無い。静かに光り、癒してくる月は、新月ゆえに出ていないけれども、それはそれで違った趣があった。

テラスに女性が出て来た。カゲミのママである。その後ろからは、ばけねこポケモンのニャースが付いて来る。額の小判が特徴的だ。

「ん〜！ よく寝たわ!」

両手を広げ、大きく伸びをする。

「よーし……っ！ ママ、片付けるわよ〜！」

テラスの傍に積まれた幾つかのダンボールを見て、気合いを入れ直したようだ。家具は配置済みであつたけれども、まだ小物類などはダンボールの中にある。

「ニヤース、カゲミ呼んできて！」

「ぬにゃあー！」

?????????



——ここは、どこだろう？

私は首を傾げた。ついさつきまで、私は部屋にいたはずなのに。周りを見回したところ、どうやら全然違うところに居るみたい。

「……あ、そうだ。私、寝ちやつたんだ」

そうそう思い出した——アローラに着いてから、部屋にダンボールを運んで、それからどつと疲れに襲われちやつたから、一休みしようと眠ちやつたんだ……。

ということとは、これは、夢か。

アローラに来て初めての夢！ わあ！

……と、興奮したいところなんだけど。

「なにここの……気持ち悪い」

変な……洞窟? みたいなどころに私は居た。得体の知れない鉱石が壁に埋まっ  
いて、綺麗に光っている。けれども、どことなく、空気がどんよりとしていて……重苦  
しい。

「……………」

取り敢えず、進んでみることにした。どうせ夢だと分かっちゃったのだから、まあ、危  
険は無いよね。

そこかしこに、捻じ曲がったような、奇怪な岩が……いや、植、物……? かな?  
分かんないよ……ともかく、奇妙な物体が生えて、或いは突き出していた。不気味すぎ  
る雰囲気。

道幅は狭くないけれど、妙な圧迫感があった……いわゆるプレッシャーというやつ?  
こういう感覚のことを言うんだろうなと思った。

暫く歩くと、上の方から光が射している場所に來た。行き止まり。

「あれ……?」

変な場所。出口はどこなのだろう?

もしかして、天井の穴が出口とか……ポケモンも居ないのに、どうやって出ると。無  
理です。

うーむ、とんでもない夢だ。目覚めを待つしかないだなんて。誰か早く起こしてくれないかな。

座るのに適した石があつたので、取り敢えず座つてみた。ずっと立っていても疲れるから。

すると。

なんと。

「っ!?!」

石がずぶりと沈んでしまったではないか——いや、石だけじゃあない、周りの景色が、光が、全て沈んでゆく。

「なにこれなにこれ……!?!」

重苦しくも綺麗だった世界は、ドロドロに混じり合い、ドス黒い泥のようになって、私を呑み込んでゆく。覆いかぶさってくる得体の知れない感覚が、ただただ不快だった。

「じえるるつぶ」「じえるるつぶ」「じえるるつぶ」「じえ」「じえるるつぶ」「じえるるつぶ」

何かが蠢くような音が聞こえた。ドス黒くなった世界はだんだんと暗闇に包まれてゆく。その中で、じゆるじゆるとも言うような音とともに、私は真つ白い、不定形の影を見た。それは闇が深くなるとともに形を変え、真つ黒い、人型になっていった。

「じえるる」「……」「じえるつぶ」「……」「じえるるつぶ」「……」「……」

落ちてゆく。黒い人型の影が暗闇に吞まれてゆく。

怖い——いったいどこまで落ちてゆくのだろうか？ 落下する感覚だけがひたすらに

続いているのだ。怖い。どうしてまだ目が覚めないの？

早く起きて。

早く起きたい！

「ぬにゃー！」

「ん!？」

と、その時、思いが通じたのか、聞き覚えのある声がぼんやりと聞こえた。

「ぬにゃあー！」

間違いない、うちのニャースだ！

と思った瞬間、落下する感覚が一瞬にして消えた。その代わり、現実的な痛みが襲っ

てきた。

「たにゃあ!!」

カゲミの部屋





「あ痛っ!？」

思わずがばりと起きた。慌てて周りを見たが、うん、見馴れた物ばかりだ——レイアウトはちよつと見馴れないにせよ。来たばかりだから。

「もー、ニヤース……ひつかかないで〜」

「ぬにゃ」

別に血は出ていないものの、ちろつと痛む腕をさすりながら、ニヤースに注意した。

じとつ、と私を見るニヤース——あら、この様子だと、結構起こそうと奮闘してくれたみたい? なんてこと、さつと起きなかつた私が悪いのでは。

「あー、ごめんね。ありがとう、ニヤース……おはよう」

「ぬにゃ〜!」

私は頭を掻きながらベッドから降りた。と、動いてみると何だか服がべたべたする。脱いでみると、汗でびっしりになっている。うわあ……。

「お着替えしないと……」

クローゼットから替えの服を取り出した。アローラに来たら着るつもりで買った新しい服だけれど、まさかこんな形で着ることになるうとは。

ページユ色で、花柄のカットソー。緑色のカジユアルなホットパンツ。ああ、アローラに来たんだ! つて、感じがする!

「ねーねーニヤース、似合ってる？ 似合ってる〜？」

「ぬにゃあー！」

表情から察するに、きつと似合ってるって言ってくれてるんだと思う。うん。そうだろう。

「あーつと……あ、もしかして、ママ呼んでるの？」

「ぬにゃー！」

「あー、きつと手伝いだあ〜。服の洗濯は後回しかな」

はあ……初っ端からあんな怖い夢を見るだなんて、私ってばツイてない——なんて、もう殆ど内容覚えてないんだけどね。

### 一階・リビング



「おはよう、ママ〜」

「ぐっすり寝てたわね。もう元気になったでしょ？」

「んー、まあまあ」

楽しそうに鼻歌交じりで、ダンボールの風を剥がしているママ。えへへ、この分なら私が手伝う幕はなさそうだな。だといいな。

元々このアローラ地方への引越しはママからの提案だった。どうやら長年の夢だったらしい——けれどうちは母子家庭だったので、アローラまで引越しするお金は無かった筈だった。

が、なんとポケモンくじに運良く当選したこと、ククイ博士と知り合えたことなど、色々重なって、引越しが実現したのであった。ママはこの件について、一生分の幸運を使い果たしたと言っていた。そりゃあ……。

「ねえミツキ、アローラのポケモン、楽しみ？」

「もちろん！ カントーでは見られないポケモンがあちこちに居るんでしょ？」

「そうなの！ あたしも早く会ってみたいわ——なんてつつあって、リゾートとしても有名なアローラ地方！暮らしてるポケモンたちも、みんなゴキゲンに決まってるわよ！」

「気合い入ってるね〜！ ママ」

とつても楽しそうで何よりである。かく言う私も、それに負けないくらい、楽しみなんですけどね！

と、その時、ピンポン、とチャイムが鳴った。

「あら、チャイム。きつとククイ博士だわ。ミツキ、ちよつと出て」

「はい」

と言って、ドアを開けましょうと歩きだしたところ、なんとドアを勝手に開けて勝手

に入ってきた。

「アローラ!!」

白衣を来たククイ博士は陽気にそう言って手を挙げた。いや勝手に入ってくるのは如何なもの? ちよつと動揺しながら、真似して手を挙げた。

「ア、アローラ〜!」

「こうして実際に会うのは、初めましてだね。カゲミ——改めて自己紹介を! 僕がククイです。よろしく〜!」

「あつはい! こちらこそ——カゲミです。よろしくお願いします!」

「アローラ地方への長旅、お疲れ様! 時差ぼけは大丈夫かい? アローラとカントーは遠く離れているからね——こっちは昼で、驚いただろ? なんて、今はもう夜だけど」

「ククイ博士! 今朝、到着しましたわ」

「たにゃ!」

今度はママが挨拶した。ニヤースも一緒に。

「ああお母さん! 改めまして! ククイと申します。ようこそ、アローラへ!」

「カントー地方で見たジムリーダーとのポケモン勝負! 今でも思い出せます! あれでアローラのポケモン好きになって、来ちゃいました!」

「いやあ! ポケモンの技を研究するためとはいえ、ジムリーダーたちにいいようにや

られましたけどね！」

ママがアローラ地方に来たがっていた理由が、まさにこれ。私はまだ小さかったし、知らなかったんだけど、どうやらクワイ博士、カントー地方へ一時期引越していらしい。それで、カントー地方にある八つのジムに挑戦して——なんとポケモンリーグ出場まで行ったらしい。流石に、チャンピオンのは負けたらしいけれど……それでも凄い。

「さて、カゲミ！」

博士は私に向き直って言った。

「隣町に行こうぜ！　そこで『しまキング』からポケモンを貰うんだ!!」

「!!」

結構唐突だったので、一瞬言葉を失った。

「し——しまキングって」

「ああ！　しまキングはね、ポケモンを戦わせたなら敵なしのポケモントレーナーさ！　リリィタウンでは、冒険する子供のために、しまキングがポケモンをくれるんだ」

「まあ！　ポケモンをくださるの？　しまキングって凄いのね！」

ママが嬉しそうに手を叩いた。

「ほら！　ミツキ、準備をしなくっちゃ！」

「あ、えっ……」

「貴女の部屋のダンボールに帽子とバッグが入ってるはずよ。あと机の上に、お父さんの手帳、置いてなかった?」

「う、うん。分かった」

「おっ! どんな帽子か、僕も楽しみだぜ!」

ククイ博士はにやりと笑った。お世辞とかではなく、心からそう思っているというのが雰囲気から伝わってくる。

取り敢えず、私は部屋に帽子などを取りに行った。

カゲミの部屋 ▼

「ふう……」

動転した気を鎮めるため、少し深呼吸した。ふう。

……ついに、私、ポケモントレーナーになるんだっ! ちよつと気が早いけれど、やる気持ちを抑えられない。全然気持ちが鎮まってる! 10歳になると、子どもたちはみんな、自分のポケモンをゲットする事が許される。けれど、私は今までポケモンをゲットしたことはなかった。いわゆるキープというやつ

もしてもらっていない（因みに、ニヤースはあくまで、ママのポケモン）。

それは、私の希望でそうなっていた——私は、冒険の最初にゲットしたポケモンを、初のパートナーポケモンにしたい、と思っていたから。

私は机の上の手帳を手に取って、パラパラとめくった。

この手帳は、お父さんがくれたものだ——昔、お父さんも、カントー地方を冒険していたらしく、そこで得た旅に役立つ知識とかがメモされている。私は手帳をポケットに入れた。

「ふふふ……！」

ニヤニヤ笑いながら（我ながらこんなにやけるなんて、と思った）、赤いニットキャップとシオルダーバッグをダンボールから出した。ママが選んでくれた帽子とバッグ。かわいい！

そして装着！ 似合ってるのかな？ ニヤースは一階に居るから、ちよつとどんな具合か、分からない。けど、大丈夫だよねきつと！

後は、ポケッチよし、ホロキヤスターよし。ママのセンスを信じて、私は下の階に降りた。



一階では、ママと博士が談笑していた。私抜きで何を話してるのかなと、ちよつぴり仲間外れにされたような気分……になったけれど、よくよく聞いてみると、私が交じっても口を挟む幕がなさそうな話だったので、別にいいやつて思った。

「あら、準備ばつちりね! 似合ってるわよカゲミ!」

「おつ、良い帽子だね!」

「ありがとう、ママ、博士」

降りてきた私を見て、ママと博士が言った。ちゃんと似合ってるみたいで良かった……私が選んだわけじゃないけれど、似合ってなかったら、それはそれでやっぱりシヨツクだからね。

「よし、行こうぜ! リリイタウン! しまキングからゴキゲンなポケモンを貰うんだ!」

ククイ博士は腰に手を当てる快活に笑った。気持ちのいい雰囲気の人だなくって思う。

「いつてらつしやい! ポケモンが来る前に、ママ、ばつちり片付けておくから!」

「にやあ!」

やったあ! じゃ、なくて、ありがとうママ!



……どうしよう、自分だけ楽しんじゃうっていう罪悪感もあるけれど、掃除しなくていいから楽出来て嬉しいっ！　　っていう感情もあるよ……。

なんて悪い子なの、カゲミ。

「ありがとう、ママ——じゃあ、いつてきます!!」

と思うものの、ごめんなさいも言わずに、ククイ博士を追って私は外に出た。ポケモンを貰えるのが嬉しくて、つい言い忘れてしまった——自分に都合のいいことばかり考えちゃう私はやっぱり、悪い子なんだろうな。

# リーリエとほしぐもちゃん

## 【第2話】

リリイタウン ▼ ポケモンに感謝するところ

「来たぜ！着いたぜ！！リリイタウン！！」

「わぁー！」

……と、感嘆したけれど——この反応から連想されるような大きい町ではなく、どちらかといえば、村と言った方が正しいようなところだった。

お家の数は少なく、ところどころに木が生えている。ここまで結構歩いて、まるでなだらかな山みたいなどころだと思っただけけれど、ここもまた、自然のままと思わせるような雰囲気があった。

岩を削ったような階段を上ると、そこにあつたのは、結構大きなお家と、中心に大きな土俵のようなものが。何に使うのだろうか？ それこそ、相撲とか？

「ここではね、カゲミ。メレメレ島の守り神であるポケモン……カプ・コケコを祭ってい

るんだ！」

ククイ博士が言った。

「カプ・コケコ……守り神ってことは、伝説のポケモンなんですか？ カントーで言う、サンダー、ファイヤー、フリーザー、のような」

サンダー、ファイヤー、フリーザーというのは、カントー地方に伝わる伝説のポケモン。伝説と呼ばれるだけあつてか、おとぎ話とかにも引つ張りだ。だから知っている人は多いのだ。会ったことのある人は……居るのかどうか。

「そうだね。けれど、彼らほど姿を見せないって訳ではないんだ。特にカプ・コケコは気紛れだけれど、それ故に、割と現れるよ」

「へく。特に、つてことは、他にも守り神ポケモンは居るんですか？」

「4体だ!!」

「うえっ!?!」

ククイ博士は語調を強めて、指を四本突き出した。突然だったので変な声が出てしまった。

「4つの島に、それぞれ守り神が居る——このメレメレ島に居るのはカプ・コケコ。アーカラ島にはカプ・テテフ。ウラウラ島にはカプ・ブルル。そしてポニ島にはカプ・レヒレ——といったようにね」

「成る程。……守り神、かあ」

会えるものなら、会ってみたいと思うけれど——まあまず、無理だよな。なんてつたつて神と呼ばれしポケモンだもの。会いたいと思つて会える訳ないか……ああ、また分不相応なことを考えちやつて私つたら……。

「あれ？ うーん」

ククイ博士は周りを見回した。どうしたのだろう？ 私も真似してみる。

「おかしいな……みんなここで待ち合わせなのに」

「待ち合わせ？ ああ、えっと、しまキングさんですか」

「うん。その筈なんだけど——もしかしたら町の奥……マハロ山道にいるのかも。守り

神カプ・コケコの遺跡があるからね」

「マハロ山道……」

ククイ博士は土俵を挟んだ向こう側を指差した。

「カゲミ！しまキングを探してくれないか？ 僕は行き違いにならないようこの辺りを

探すからさー！」

「え!? いやそんな……いきなりそんなこと言われても!？」

私、まだポケモンを貰ってないし！ 私、ここに来たばかりで何にも知らないし!？」

「心配無用だぜ！ 山道とは言つてもそんな急じゃあないし、ポケモンが飛び出てくる

ような草むらもないからね。入り組んだところでもないし」

「そ、そうですか……？ 信じますよ」

「僕は嘘なんてついたことはない！ カプ・コケコに誓ってね」

「は、はあ」

神様に誓って、のアローラバージョン（というかメレメレ島バージョン？）。まあでも、嘘をつく理由もないし、博士だからその辺ちゃんとしてると思うし、うん。多分、大丈夫だよね！ そうだよね！

「分かりました——あ、でも、私しまキングさんがどんな姿なのか知りませんけど」

「しまキングはね、見るからにしまキング！ って感じだからね！」

「なんて曖昧な！」

「ま、この先は遺跡だし、殆ど誰も滅多なことでは近付かないからさ。誰か人が居たら、それは十中八九しまキングだ」

「うう……：分かりました」

曖昧すぎて何にも分からないけど……。

まあ、なんとかなるよね！ を合言葉として胸に刻み、ククイ博士と別れたのだった。

マハロ山道入り口付近



「……ん？」

マハロ山道の入り口と思われるところ（不思議な置き物が両脇に置かれていたのですぐ分かった。こういうの、トーテムポールって言うんだっけ？ 違うかな）近くで、私は足を止めた。誰か、知らない人がいる——山に登ろうとしているのかな？

それは女の子だった——私より、ちよつと年上っぽい子。金髪で、大きくて白いツバ付き帽子を被り、同じく真っ白いワンピースを着ている。肌も凄く白くて、綺麗だな——って思った。

「……遺跡になにがあるというのです？」

女の子の独り言。肩から下げたバッグに向かって話しかけている……何か入っているのかな？ 何だろう。

「あっ」

女の子はそのまま、マハロ山道へと歩いて行った。私も、ちよつとぼかんとしたけれど、あの子を追うように山道へと入って行った。

マハロ山道



「バッグから出ないで……誰かに見られたら、困ります」

「……………」

やっぱり一人で何か言いながら登る女の子。……というか、本当に一人なのか？

バッグから出ないで、つてことは、あのバッグの中には小さいポケモンが居るのかな？

マハロ山道は、博士の言う通り（別に疑っていた訳じゃないけれど）決して急ではなかった。心配はやはり杞憂に終わった。

ところどころ道の端には、入り口にあったような不思議な置き物が置かれてある。なんだか見られているようで、ちよつと落ち着かない。だからなのか、雰囲気が独特で——或いは神聖とでもいうのか——どことなくプレッシャーめいたものを感じた。

「こんな感覚、さつきもあつたような……いや、気の所為か」

そんな独り言を言いながら歩いていると、同じく独り言（かどうかはちよつと怪しい）を呟く女の子をまた見つけた訳である。

誰かに見られたら困る？ いったい何を入れているのだろうか？ 気になるなあ……いやいや、人の秘密を詮索しようとするとか、悪い子すぎる……。

……もしかして、もしかすると、あの子がしまキングさんなのかなあ？

ふと、そんなことを考えた。だって、誰か人が居たら十中八九そうだって博士が言っていたし——でも、見るからにしまキング！ っつてえ雰囲気でもないんだよね。

なんて考えつつ、だから確信も持てず只管気付かれずに付いていくと、吊り橋にまで辿り着いた。すると――

「ぴゅいつー！」

――と、女の子のバッグから、鳴き声と共に何か飛び出した。

それは、ポケモン……だと思った。けれど、見たこともない。本でも見ない（そもそもあんまり本読まないんだって）。まるでその小さな体は雲のようで、その夜色の体に煌めく光は星空を連想させた。だから雲というか――そう。宇宙だ。雲は雲でも星雲のようだった。

「ああっ……！！」

「ぴゅぴゅうー！」

「ダメ、ダメ、です！ そっちは危ないです……！！」

「ぴゅー！」

女の子は、星雲のようなポケモン？ を再びバッグの中に戻そうと手を伸ばしたが、小さな星雲は言うことを聞かずに吊り橋の真ん中まで飛んで行ってしまった。

「も、戻って……戻ってきてください……！！」

「ぴゅぴゅうー！」

「もう……っ！」



女の子とは反対に、楽しそうに鳴く謎のポケモン。なんだか見ていたたまれなくなってきたんだけど……どうしよう？

と、出て行くか出て行くまいか迷っていた、その時である。

「「ピイイーッ!!」」

「!？」

「びゅ!？」

「この鳴き声……っ!!」

鳥ポケモンのような鳴き声が、突如響き渡る。なんとなくだけど、三匹分のような気がする！

「バ、バッグに戻って……早く、戻ってくださいっ!!」

「びゅ、びゅ——」

「ピイイッ!!」

「びゅう!？」

「ピピイイッ!!」

「びゅびゅう!？」

「ピピイイッ!!」

「びゅびゅうーっ!？」

な、なんてこった！ 吊り橋の上の子が、鳥ポケモンに囲まれちゃった!?

ポケモンの種類に疎い私でも、あのポケモンは知っている——あれは、オニスズメ！  
ことりポケモンのオニスズメだ！

「ピピッツ!!」「ペイイー!!」「ピピピッツ!!」

「びゅ……」

翼をばたつかせながら取り囲む三匹のオニスズメ……ちよつ、これピンチだよ!? な  
んてこった、なんて状況に出くわしちゃったんだ私!?

「ああ……っ!」

呻き声をあげる女の子。怖いのか、足が震えている——ああ、絶対しまキングじゃな  
いや——けど、このままじゃあ、あのポケモンがやられちゃう!

「ええい、ままよーっ!!」

「!？」

もう自分でも何やってるんだとツツコミをいれたいのだけれど——思わず飛び出し  
てしまった。びくりとしてこつちを見た女の子。

「あ、あなたは!?! い……いつから……?」

「ごめんなさい! あなたのこと、ずっと尾けてました!」

「尾け……!?!」

「ああいや、別に悪意も悪気もなく、つい偶然そうなたちやっただけで、とにかく敵じゃないからごめんなさいっ!!」

「つゝ!? つ…………!?」

「え、えつと、そんなことより、今大変なんじゃないの!?!」

「! そ、そうです…………あのコが…………ほしぐもちやんが!」

「ほしぐもちやん…………」

「ぴゅ…………」

怖そうに震えながら、力なく“ほしぐもちやん”が鳴いた。

「オニスズメさんに襲われ…………でも…………私、怖くて…………足が、竦んじやつて…………」

「ぴゅ…………」

「ど…………どうしたら…………」

「つ…………そ、そんなの、どうしたらって程の事じゃあないよね?」

「え…………?」

全く、なんて頼りないのだろう。そんなことでポケモントレーナーが務まるとでも思っているのだろうか。

トレーナーっていうのは、ポケモンの為ならどんな怖いことだって乗り越えられる人のことを言うのだ——私のお父さんは、そうだった!



「ほ、ほしぐもちゃんっつ！」

私はオニスズメの攻撃が当たらないように、ほしぐもちゃんに覆い被さった。自己犠牲精神とかなんかもう……ほんと……。

「ピイツー！」

「つつっ!？」

自己嫌悪から私の思考を逸らすかのように、オニスズメの爪が私の頬を掠めた。痛い、けれど、多分血が出るほどじゃあない。跡は付いたかも？

「びゅ……びゅう……」

「だ、大丈夫……多分」

心配そうに私の顔を見るほしぐもちゃん。

しつこいなオニスズメ——ああ、ポケモンが居ればいいのに！ そしたら、少なくともこつちから反撃出来るのにくっ！ 歯痒いつたらないよっ！

「びゅう……びゅう……!？」

「! ほしぐもちゃん?」

その時。なんとほしぐもちゃんが光りだしたではないか。なんだなんだ、何が始まったの？

「びゅ……びゅう……!!」

「これ、いったい——」

「ぴゅう——ぴゅうっ!!」

ほしぐもちゃんの光はどんどん増幅し、目も開けていられないほどにまで——と思つた瞬間！ 謎の浮遊感が私を襲つた！

「え？」

眩しくなくなって、目を開けた——すると、さつきまで目の前にあつた橋がなく、代わりにその下を流れていたはずの川が見えた。そして、再び眼を閉じたくなるほどの風圧が襲い来る！

つまり……私たち、落ちてる!?

「えええ——っ!!?」

うわっ、うわうわうわうわあ——っ!! なんで!? なんで私落ちてるの!? もしかして、橋が壊れたの!? さつきの光の所為——っていうか私死ぬの!? ここで死ぬの!? 助からないよねこれ!?

「ぴゅ、ぴゅぴゅぴゅっ——!」

私の腕の中でほしぐもちゃんが声を上げた——いつの間に私、抱いてたの!? いやそれよりも、どんどん川が近くなっている! つまりどんどん落ちてるってこと! ああ、もうこれは諦めるしかないのか……?!

あー、なんか昔の記憶が蘇ってきた。駄目だこれ走馬灯だ、これ駄目なやつだ……。これから、ようやくポケモンを貰えると思ったのに——ほら、なんか光が見えてきたよ……。星なんかとは比べ物にならないほどの光が——？  
んん？

「——なにあれ」

「ぴゅっ……？」

天地が幾度も回転し逆転する中、遠ざかっていく筈の星の中にどんどん近付いてくる光があった。光はオニスズメたちを弾き飛ばし、猛スピードで私たちに向かってくる——  
——ええ……？

追い討ち……？ 叩きつけられるだけでもういいでしょ、それだけで十分死んじやうだろうしき、これ以上はやめてほしいな……。

光——いや、なんかバチバチいつてるし、もしかすると電撃かも——が、すぐそこにまで迫ってくる。どうぞどうぞ、もう諦めました。焼くなり潰すなり好きにして。

「カプウウーッ!!」

「!!」

電撃の中から甲高い鳴き声が聞こえた。電撃が先に到達し、私たちを包み込んだところで、その電撃の中に何かが居たことが分かった。ポケモン？ 見たことがない姿をし

ている。鶏をどことなく連想させるフォルム、両手には大きな殻のようなものが付いている——。

電撃の中の存在が私たちを捕えた、と思うと、今度はさつきとは逆の方向から風圧が襲いかかってきた。高速で上昇している——ま、まさか！ このポケモンは私に完全なトドメを刺しにきたのではなく！

「た、た、助けに——!!」

「カプウーコツコ!!」

「きてくrrええつ!!?」

「びゅうーっ!!?」

結論から言うと、川への落下は回避できたのだけれど——このポケモン割と下ろし方が乱暴で、そこそこ激しくマハロ山道にぶつかった。ほしぐもちゃん共々。

「だ……大丈夫、ですか……!!?」

金髪の女の子が駆け寄ってきた。別に立てないほどの衝撃ではなかったの、ふらふらと立ち上がる。ただ動悸が凄い……どつくんどつくん言ってる。もつと言えば吐きそう。吐いた瞬間に心臓も一緒に出て来ちゃいそう。想像するととんだスプラッタだけども。

「大丈夫……あ、あのポケモンは？」



「びゅ……」

「あのポケモン……？ あっ」

「！」

助けてくれたポケモンは女の子の後ろにいた。電撃を纏う黄色い体。やはり鶏つばい。

「あ、あの、えっと……助けてくれてあ「コケッコー……ッ!!」!?!」

私の言葉を遮るように鳴くと、眩いほどの電撃を放出、そしてそのまま鶏めいたポケモンはまるで打ち上げ花火の如きスピードで浮上、そして空全体を覆いつくすほどの電撃を放ち——フツと消えた。

「……な、なんなの……?」

「……あの……ポケモンは?」

「びゅい……」

「! ほ、ほしぐもちちゃん! 無事ですか?」

「びゅい……!」

「良かった……です……」

女の子は安心してように胸をなでおろした。因みに私も無事だよ。

「あなた……また力を使おうとして——あのあと、動けなくなっただでしょ……もうあん

「な姿、見たくないのです」

「びゅい……」

「……ううん、ごめんなさい……あの時あなたは私を助けてくれた……なのにあなたを守れなくて……」

「なんだか二人の世界に入り込んでいるね。私、ほっぽかれてるね。別にいいけどさ……」

「びゅうー！」

「どう……したのですか!？」

「びゅびゅう!!」

「光り輝く石……なんだか暖かい感じですよ」

「ほしぐもちゃんが光る石を見つけた様子。へえ。」

「と、ぼやっとしていると、」

「あの……」

「…………あつ、私? ごめん」

「我関せずの態度を取っていたら急に振られたのでびっくりした。」

「申し訳ありません……危ないところを助けてくださり、心より感謝しております」

「ああ、いやあ……ぶっちゃけ大したこと、してないし。寧ろ生意気な事言っでごめんな」

さいつていうか」

「これ……あなたの石ですよね」

「はい？」

女の子は輝く石をくれた。いや別に私のじゃあないけれど……。

「……あの、これ」

「このコのこと……誰にも言わないで……ください」

「えっ？ ああ、そりゃあ、うん」

誰かに見られたら困るらしいものね——ああ、つまりこの石って口止め料代わり？

そんなのいらぬのに。

「あの、こー」

「秘密で……秘密でお願いします」

「……うん。分かった」

……受け取っておこう。貰ったものを返すのも、あまりよろしくない行為だ。それにこの子の物でもないっばいし。

「バッグに入れてください」

「びゅう……」

ほしぐもちゃんも素直に——いや渋々だこれ——バッグの中に入れて行った。モン

スターボールの中には入れないのかな？ ジョウト地方では親愛の証としてポケモンをボールから出して連れ歩くらしいけど、それみたいなものなのかな？

「……あもう」

「なあに？」

「このコ……もしかしたら、また襲われるかもしれません。身勝手で申し訳ありませんが……広場までご一緒に下さい」

「あ、えつと……うん。分かった——私でよければ……何にもできないけど」

「……ありがとうございます。助かります」

しまキングさんを探さなきゃだけど……吊り橋、壊れちゃったし、向こう側に渡れないのでどっち道打つ手なしだし、ここは帰るのが得策だよな。

「では、参りましょう」

女の子は歩き出した。それを見て、私はふとあることを思い出したので、彼女を止めた。

「あ、待って！」

「はい？ ……なんでしよう」

「な、名前——私、カゲミって言うの！ あなた、なんてお名前？」

「私……ですか？」

女の子はこつちを見て言った。

「リーリエです。……よろしくお願いします、カゲミさん」

「リーリエ……うん。よろしくね、リーリエ！」

「困みにこの子はほしぐもちやんです」

「びゅい！」

「あつ、バッグから出ちや駄目……」

「いやそんな無茶な」